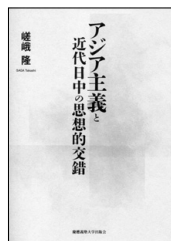


東アジアの思想交流をアジア主義から見通す

嵯峨隆著

アジア主義と近代日中の
思想的交錯

関 智英



A5判 378頁
慶應義塾大学出版会
[本体5000円+税]

アジア主義への関心が近年堅調だ。最近五年間の単行本に

限っても、副題を含めて題名に「アジア主義」を冠したものは一〇冊を超える。本書もこうした大きな問題関心の流れに位置付けることができるかもしれない。ただ、他の著作と明確に異なる部分がある。それは本書が、アジア主義を日本からの単方向的な思想としてだけでなく、アジア主義が中国にも影響し、さらにそれが再び日本の言説に影響を与えたことを重視したことだ。日中の間で行き交った思想の軌跡に注目した本書は、アジア主義研究にこれまでにない角度からのアプローチを試みたものである。

本書は三部「明治・大正期における言説と思想」「中国における受容と展開」「日中戦争下における思想の諸形態」に分かれたれ、序章・終章の他一〇章で構成される。まずその内

容を確認した上で、本書の意義に言及したい。

第一章「アジア連帯思想の形成と展開」。アジア主義の全体的特徴は、人種対立的観点と日本の指導性にあり、反欧米列強・反白人種を唱えながらも、日本以外のアジアからの反応を欠き、日本主義を本質とする偽装された連帯の思想であった。これには竹越與三郎や大山郁夫らから異が唱えられたが、アジアの抱える課題を「非日本主義」的・脱日本主義的に解決するための模索はなされなかった。

第二章「宮崎滔天のアジア革命論」。滔天の思想は民権論を立脚点とし、中国を根拠地に、日本を含む各国の社会的変革により既存の国際システムを変更しようとした点に特徴があり、一般的なアジア主義のような日本を盟主とする発想はなかった。しかし、滔天のアジア革命論は、主観的な革命願

望に支えられたもので、中国革命の可能性を客観的に分析した形跡は見られなかった。

第三章「頭山満における皇国とアジア」。頭山の対外思想およびアジア問題への関与の基礎となったのは、「国威失墜」への憂慮と、「対外進取」の精神であった。その特徴は、思想の基盤が儒教と天皇道であった点にある。そこには文化的相対主義の観点はほとんど見られず、普遍化・絶対化された天皇道の普及によって「皇アジア」、さらに進んで「皇世界」の実現が求められたのである。

第四章「中国の近代革命思想とアジア連帯論」。日本のアジア主義に呼応して、中国でもアジアが連帯して欧米列強に立ち向かう必要性が唱えられた。孫文のアジア主義は、人種対立論と日中提携を主な構成要素とし、中国革命の達成とその後の国家建設という現実的な目的に収斂するものだった。また亞洲和親会は、思想性を問わず帝国主義に反対し、アジアの民族解放を求めた。日本のアジア主義言説の批判者として立ち現れたのが李大釗で、その特徴は、アジア民族の解放を基礎にアジア全域の変革を主張した点、また人種論的観点を完全に否定し、強権主義的に他者を従属的地位に置く政策を批判した点にあった。

第五章「孫文の「大アジア主義」講演をめぐって」。孫文

のアジア主義は、日本で生まれた「アジア主義」という言辭によって、その時々孫文の外交姿勢を日本人に表明したもので、根底には常に中国革命への支援の要請が込められていた。その意味では、孫文のアジア主義は、自国変革のための便宜的な概念として用いられたものだった。

第六章「戴季陶による孫文思想の継承と展開」。孫文の生前、戴季陶は外交政策に関する限り、孫文の基本方針を踏襲した。しかし孫文歿後に形成された「戴季陶主義」は、儒教思想によって孫文の思想を体系的に解釈することを試み、孫文の「大アジア主義」講演についても、その思想面を強調した。また「民族国際」という概念を打ち出し、反帝国主義の姿勢を鮮明に表明した。そうした戴季陶の言説からは、日本との連携こそが欧米列強の介入を抑え、中国革命を達成する方途である、といった孫文の発想は全く消滅した。

第七章「侵略と抵抗の中のアジア主義」。日本では満洲事変を契機にして、アジア・モンロー主義の議論が再燃した。そこでの議論は、日本の既得権益を保護すべく、列強の介入を排するという姿勢が前面に押し出されたもので、アジアとの連携を求める要素は薄れていた。当時のアジア主義を代表する大亜細亜協会の主張も、国民党と国民政府を、中国を混乱に陥れた元凶と見なして三民主義を批判するもので、日本

中国年鑑2017

◎ 5月刊行 ◎

中国研究所 編・発行

明石書店 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、
一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 522頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝党大会と巨竜の行方

習近平平政権は、国内外にさまざまな問題をかかえながら、ますます存在感を増している。今秋5年ぶりに開かれる共産党第19回大会を経て、中国はどこへ向かうのか？ 今日の中国に関する多方面にわたる情報を提供します。

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、
対外関係、経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2016年日誌ほか
※お問い合わせ・ご予約は
中国研究所事務局まで

一般 中国研究所
社団法人

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

のアジア主義は、中国侵略を全面的に支える思想へと変化した。対照的に中国では、胡漢民が抗日民族主義を大アジア主義と連結させ、日本批判の理論とするなど、孫文の大アジア主義を三民主義の中で再解釈しようとする傾向が現れた。

第八章「東亜新秩序の思想」。東亜共同体論のうち、蠟山政道は東亜協同体を地域運命共同体として捉え、その成立のためには東亜という枠組みを意識する必要があるとした。三木清は東亜文化の成立をもつて東亜の統一実現を試み、新明正道と高田保馬はナショナリズムの基本的性格の中に共同体成立の要因があると考えた。以上はともに高揚する中国ナショナリズムに対しては批判的であったのに対し、尾崎秀実、抗日ナショナリズムを正面から受け止め、日本の社会改造による対応を試みた。尾崎の思想内容は体系的には論じられ

なかったが、真の日中連帯の思想となる可能性を孕んでいた。

第九章「汪精衛の日中提携論とその思想的根拠」。国民革命時期の汪精衛は徹底した反帝国主義に貫かれており、その思想において孫文の「大アジア主義」講演は絶対的な意味を持つていなかった。その後、和平運動の渦中で汪精衛は孫文の思想と言説を動員することとなる。しかし汪精衛を通した大アジア主義は、アジア解放を唱えながら、実際にはアジアを侵略した日本の政策の前に結実することなく、思想として不本意な結末を迎えることになった。

第一〇章「東亜連盟運動と中国」。日本の東亜連盟運動は中国のナショナリズムを一定程度評価する枠組みを持っていたが、満洲国を介在させつつ日中提携を図った点で、その東亜連盟論には限界があった。ただし中国側が東亜連盟論の政

治独立の条項に魅力を覚えたように、中国での東亜連盟運動は、国内的課題に動機づけられたものであった。

終章では、戦後のアジア主義を巡る動向に触れた上で、今日では政治的成果を求める余地はなくなったものの、その理念の中には、世界の画一化と価値の押しつけに抗する新たな価値原理創出の根拠の可能性があると指摘する。

以上の概要からわかるように、本書のテーマは多岐に亘っている。評者の力不足からその内容を十分に紹介出来ないことが悔やまれるが、以下評者の関心に沿って三点に絞ってその意義に触れたい。

一つには、これまで学術的に検討されることの少なかった頭山満の思想的な側面にアプローチを試みた点である。著者も指摘するように頭山満にはまとまった著作はほぼなく、また言行の時期確定の難しさなど、その研究には困難が伴う。しかし頭山が近代日本で影響力を持ったことは確かであり、複合的な観点からこれを検討する必要がある。本書では孫文に着目することで、その影響力の一端を明らかにできた。頭山の影響力を過大に評価することには慎重でありたいが、一九三〇年代に神道的な言説で国家を論じ、日中戦争勃発直後に成立した上海市大道政府で顧問を務めた西村展蔵のように、頭山を評価した人が少なからずいたことは確かである。

本書のように、その影響力から頭山を再検討するのは一つの有効な方法と言えよう。

二つには、日本のアジア主義に呼応して中国で展開された議論について掘り下げて検討した点である。確かに著者も指摘するように、アジア主義が中国では日本ほどの広がりを見せなかったことは、これまでも指摘されてきた。これには中国では、「西洋」に対する概念としては、まず「中国」あるいは「中華」という枠組みが対置され、「アジア」や「東洋」といった概念が一般的でなかったことも大きい。しかし中国でアジア主義が全く受容されなかったわけではない。むしろ本書が明らかにしたように、孫文・胡漢民・李大釗といった人々は、確かに日本のアジア主義に反応し、自らの思想を組み立てていたのである。ただ中国において語られたアジア主義は基本的に、中国の内政問題や外交問題の文脈に沿った形で現れ、日本同様に「アジア」なるものは実体を持たず理念的なものに過ぎなかったのである。

三つには、日中戦争時期の日本占領地における思想状況の一端を明らかにした点である。例えば占領下華北における民衆団体である新民会の中央指導部長の繆斌が、自らの唱えた新民主主義によって三民主義の民族主義や民権主義を再解釈したという指摘は大変興味深い。日本の占領は八年に及

ぶが、地域や時期によってその事情は一樣ではない。時々
状況に合わせながら、その立場を微調整していた繆斌の姿は、
単なる日本の傀儡では収まらない占領地に生きた中国人の主
体的動きを象徴するものと言えるだろう。

本書にもあるように、アジア主義はそれ自体で体系的な
持つて完結したものではない。しかし、対外的な危機といっ
たある種の問題に直面した際に、それを乗り越える方途とし
てしばしば「アジア」なるものが想起され、それを基準に物事
を説明することが一定の説得力を持った時代が確かにあっ
た。アジア主義と近代日本との関係をこのように説明するこ
とも出来るだろう。ただ日本でも、そして中国においても、
そこで語られた「アジア」の中身は極めて曖昧なままだった。
近代日本の思想状況を東アジアの中に位置付ける上でも、
本書は必読の書である。

(せき・ともひで 日本学術振興会特別研究員)

館蔵 東洋陶磁展

中国の陶磁器、朝鮮の高麗青磁、およびベトナムの青花・
五彩など約50点を展示。

▼会期…1月24日(火)～5月14日(日) 10時～17時
(入館は4時30分まで) *月曜休館

▼会場…松岡美術館(東京都港区白金台5-12-6) 東京
メトロ南北線・都営地下鉄三田線白金台駅徒歩7分

▼観覧料…一般800円、65歳以上・障害者700円、
中高大生500円

▼お問い合わせ…03-5419-0251

江戸と北京―18世紀の都市と暮らし―

江戸・日本橋の賑わいを描いた「熙代勝覧」と、乾隆帝80
歳の式典に沸く北京の風景を描く「乾隆八旬万寿慶典図
巻」、康熙帝60歳の式典を描いた「万寿盛典」を並べるなど、
18世紀の江戸と北京の都市生活を比較展示。

▼会期…2月18日(土)～4月9日(日) 9時半～17時半
土曜は19時半まで(入館は閉館の30分前まで) *月曜休館

▼会場…東京都江戸東京博物館1階特別展示室(東京都墨
田区横網1-4-1) JR総武線両国駅徒歩3分、都営地下
鉄大江戸線両国駅徒歩1分

▼観覧料…一般一、四〇〇円、大学・専門学校生一、二〇〇円、
中学生・高校生・65歳以上七〇〇円

▼お問い合わせ…03-3626-9974